

塘研究室現地調査報告 11

9月27日に表磐梯にて現地調査を実施しました。林宏至朗君の調査の第6回目で、塘と黒沢研究室の首藤君が同行しました。午前中は水生植物の被度調査(林・首藤)と池周囲での水生昆虫の成虫調査(塘)、午後は池内の底生動物相調査(林・塘)を行いました。水生植物は一部枯れ始めたものがあり、アカネ属のトンボ類(赤トンボ類)も全体に個体数が減り、ナツアカネとマイコアカネは姿を消しました。多かったのはアキアカネとキトンボでした。とは言え、池の水面はまだ浮葉植物でほぼ覆われており、ヒツジグサはずいぶん開花していました。アオイトトンボは池周囲の林内からはいなくなりましたが、池内の抽水植物には夥しい数のペアがとまり(一部オオアオイトトンボ・ペアも)、メスが産卵していました。ヤンマ類はギンヤンマの数は減り、オニヤンマも見られなくなりました。一方、オオルリボシヤンマは相変わらず多く、オスが縄張り争いを繰り返し、メスは岸辺近くで産卵していました。イトトンボ類はキイトトンボやクロイトトンボが姿を消し、代わりにアジアイトトンボが見られました。水生昆虫ではありませんが、浮島には多数のバツタ類とコオロギ類(ササキリ類を含む)が見られました。

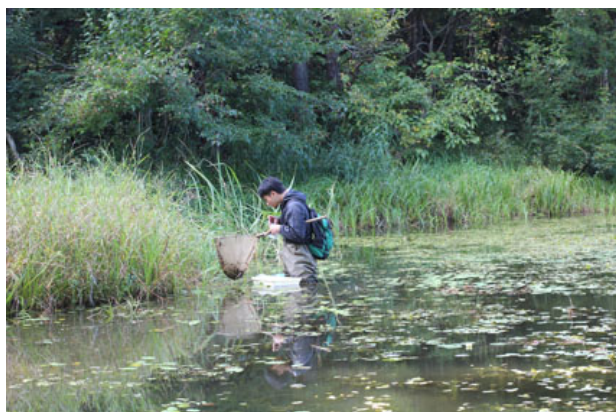
水面の浮葉植物上にはムモンミズカメムシが多く、アメンボ類は幼虫が多数を占めました。ガガブタネクイハムシはごくわずかしか見られなくなりました。水中にはものすごい数のイトトンボ類(アオイトトンボ類、モノサシトンボ類を含む)の幼虫がおり、ヤンマ類の幼虫もかなりの数が見られました。ゲンゴロウ類も種類(クロ、マルガタ、ヒメ、キベリクロヒメ、ケシ、ヒメケシ、コツブを今回確認)と個体数が増えましたが、ミズスマシ類(オオミズスマシとヒメミズスマシ)はほとんど見られなくなりました。トビケラ類はエグリトビケラが産卵に訪れており、抽水植物の葉に卵塊が見られました。沈水植物(浮遊植物)にはかなり小さなエグリトビエケラの幼虫が多数認められました。約1ヶ月で陸上も水中もずいぶん様子が変わることを実感しました。



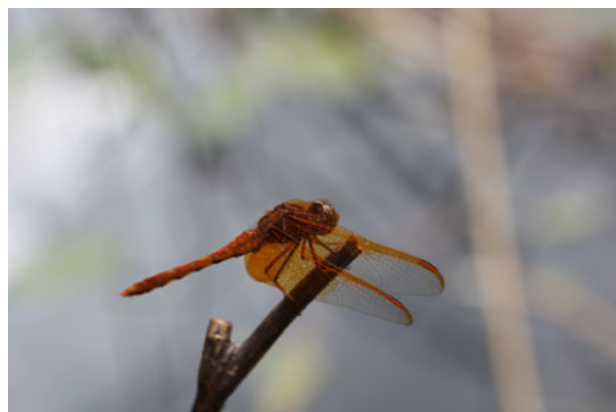
ボートを使った被度調査



胴長をはき、箱メガネを使った被度調査



Dフレームネットを使った底生動物相調査



今回の調査で比較的多かったキトンボ